



営農情報

第96号 令和2年6月1日

南筑後・久留米普及指導センター
福岡大城農業協同組合

「あまおう」6月の管理

10a 当たり収量 5 t 以上を目指しましょう

＜JA全農ふくれん実績（5月20日まで）＞

※（ ）内は前年対比

	生産者数	栽培面積	10a 当たり数量	10a 当たり金額	平均単価
JA福岡大城	283名 (99%)	64.2 ha (100%)	4,213kg (95%)	6,357千円 (98%)	1,509円/kg (103%)

令和元年産はシーズンを通して高温で推移したため、各果房とも小玉傾向であった一方、展葉が良く5月以降の収量が伸びたことで2年連続で販売金額40億円を達成しました。ただし、①夏場の極端な気象条件による苗質の低下、②3番果房の収量伸び悩み、③萎黄病や線虫等の土壌病害虫発生などの課題も多く、次年度に向けて対策の徹底が必要となります。特に、苗質の改善と土壌病害虫対策は夏場の管理が重要となります。収量安定に向けて、気象条件に応じた計画的な作業を行いましょ。

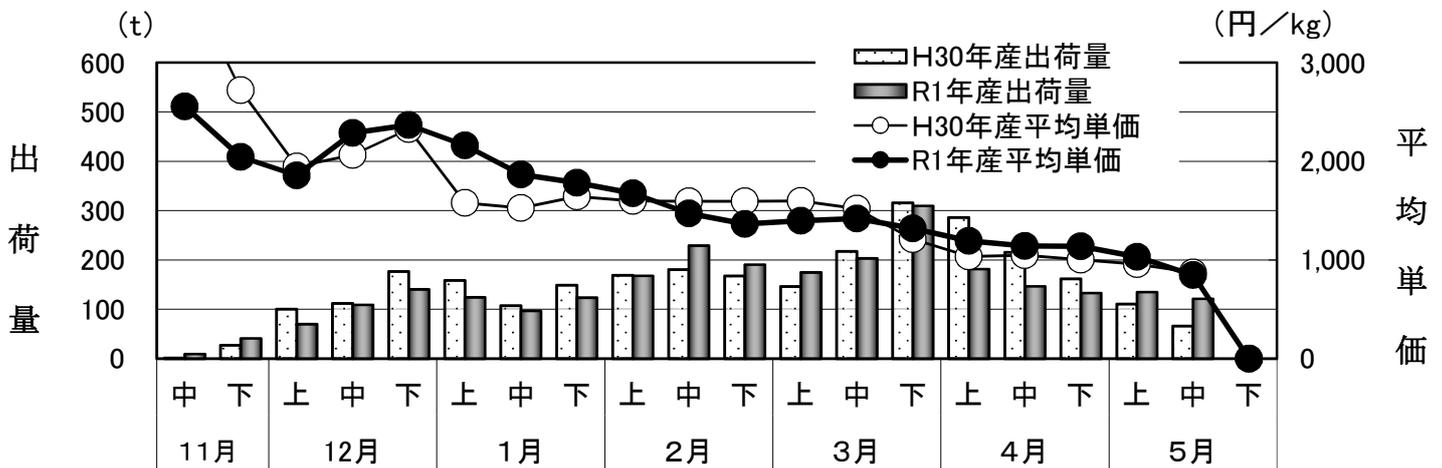


図1 JA福岡大城のイチゴ出荷量と平均単価の推移

＜JA全農ふくれんデータ＞

今後の管理

＜育苗目標＞

- ・クラウン径 10～12mm以上の良苗づくり（収量確保）
- ・作型に合わせた苗づくり（まず、作型を決めましょう）
- ・病害虫のない苗づくり（炭そ病、ハダニを本ほに持ち込まない）

今年は平年と比べて降雨が少なく、かん水不足や肥料切れによるランナーの発生が遅れているほ場もみられます。親株からの切り離しが遅れると炭そ病に感染する危険性が非常に高くなります。降雨前・後の予防防除を基本に、罹病株の早期発見・除去など、炭そ病対策を徹底して下さい。

今年はハダニ類やアブラムシの発生が多く、うどんこ病の発生も見られます。適期防除に努めましょう。

採苗

降雨後の作業は避け、予防防除を行った後、親株から切り離しましょう。

【 かん水 】

- 過湿にならないよう、鉢土の乾燥状態（根の状態）を常に観察してかん水を行う。
- 活着後は午前中主体のかん水とし、徒長防止と炭そ病予防のため、長時間濡れ状態にしない。特に、夕方のかん水が必要な場合は葉水程度とする。
- 愛ポットなどの小型ポットや棚式育苗は乾きやすいので、こまめにかん水する。

【 葉かぎ 】

- 葉かぎは、活着後、根が十分に回ってから開始する。
- 葉数 3.5 枚を確保するように、古葉の葉かぎを行う。
- 雨の日は絶対にしない。
- 葉かぎ後は、必ず、当日もしくは翌日に炭そ病の防除を行う。

【 病虫害防除 】

炭そ病防除は初期防除が重要です。育苗期の①予防、②観察、③周辺株を含めた罹病株の廃棄を徹底しましょう！

<炭そ病>

炭そ病菌は、雨やかん水で保菌株から周辺株に飛散し、感染・発病します。

- 定期的な防除、降雨前後の防除及び葉かぎ後の防除を徹底する。
- 発病株と周辺の株は、ほ場の外へ持ち出し処分する。
- ポット間隔をできる限り広くとる（18cmの間隔は確保する）。
- 育苗床の排水対策を講じておく。
- 育苗中の雨よけは、病原菌の飛散防止に効果が高い（特に、梅雨期）。

<うどんこ病>

うどんこ病は、病斑のある葉を入庫または定植しないことが重要です。

- うどんこ病の症状が進展する梅雨期を中心にしっかりと薬剤防除を行う。

<疫病>

- 梅雨時期から発生し始めるので、定期的に防除を行う。なお、対策については「炭そ病」の項目を参照

<ハダニ類>

ハダニ類は外からの飛び込みはほとんどなく、イチゴの栽培サイクルの中で世代交代を繰り返します。そのため、いずれかのステージ（親株・育苗・本ぽ）でハダニ類発生を断ち切ることがポイントとなります。

- 育苗期は葉数も少なく薬液がかかりやすいため、育苗期での防除を徹底し、本ぽに持ち込まない。

本田の土づくり・土壌消毒

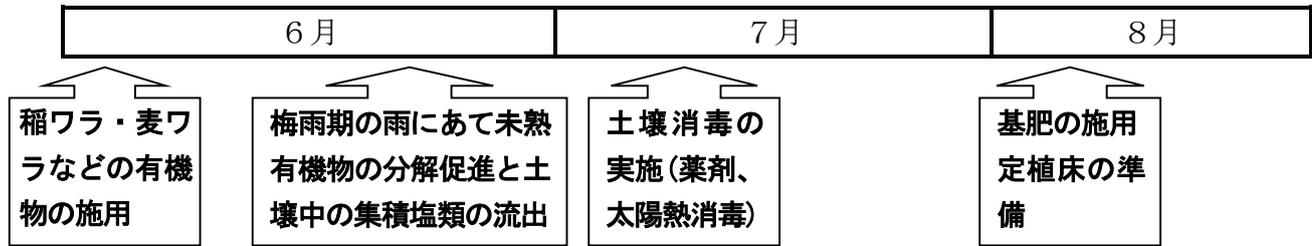
● 有機物の施用

- 1作のイチゴ栽培で消耗する土壌有機物は、堆肥約 2 t / 10 a に相当する。
- 稲ワラ・麦ワラ・家畜ふん堆肥等の有機物は、梅雨前に投入して土壌混和し、十分な雨にあてる。（分解促進、塩類溶脱のため）

● 土壌消毒

- 薬剤による消毒または太陽熱消毒のいずれかを実施する。（土壌病害虫が発生したほ場では、薬剤に

よる土壤消毒が望ましい)



～「慣れ」と「油断」が事故を招きます～
”安全”な農作業と農薬使用を徹底しましょう！

特集 「チビクロバネキノコバエの発生に注意しましょう」

昨年、管内の複数ほ場でチビクロバネキノコバエの幼虫(写真2)による根傷み、活着不良が散見され、症状がわからないまま有効な対策がとられていないほ場も見られました。下記の特徴を参考に、チビクロバネキノコバエによる被害が予想される場合はJA、もしくは、普及指導センターまでご連絡ください。

(1) 形態・生態

成虫は体長 1.8～2.3mm(写真1)、幼虫は体が白色半透明で頭部が光沢のある黒色であり、老齢幼虫は体長約 4mm となる(写真2)。成虫は、堆肥等に誘引され産卵する。孵化した幼虫は未熟な有機物をえさとし、それらに大量に発生した幼虫の一部がその後作物の地際部や地上部を加害する。

(2) 症状

幼虫がクラウン部に寄生し、根を加害する。(写真5)

初期の活着不良や苗の枯死を引き起こす。(写真3、4)

(3) 防除対策

- ・成虫は有機物に誘引されるため、育苗ほ場近隣に未熟堆肥や作物残渣を置かない。
- ・薬剤による防除を徹底する。

イチゴのチビクロバネキノコバエに対する薬剤

薬剤名	希釈倍数	使用時期	使用回数	散布液量
ベストガード水溶剤	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	100～300L/10a



写真1. チビクロバネキノコバエ成虫



写真2. チビクロバネキノコバエ幼虫



写真3. 被害株 (鉢上げから2週間)



写真4. 被害株 (鉢上げから2週間)



写真5. 根傷みの状況
(鉢上げから2週間)